

大学生の学外活動による学習成果

—九州女子大学人間生活学科の授業内における地域活動の効果—

○西田真紀子(九州女子大学)・澤田小百合(九州女子大学・九州女子短期大学)

Keyword : 地域課題解決、実践教育

【背景】

現在、わが国では人口減少とともに、少子高齢化が社会問題となっている。平成23年度から連続して人口が減少し、高齢化率は平成28年度27.3%と過去最高になっている。その中で、地域活性化を自治体、企業、大学等教育機関で行う施策がとられてきた。他方で、大学は地域を教育の場として位置付け、学生が地域で役割を果たし、その経験をもとに社会人基礎力(考え抜く力、前に踏み出す力、チームで働く力)を身につける効果を探っている。

九州女子大学家政学部人間生活学科(表1、以下「本学科」)では、地域教育実践研究センターの取り組みと連携し、「学生の質保証の強化」、「学生を中心とした地域との共生」を軸として、学生教育を行っている。入学定員40名の学科で、平成27年度からは本学科のカリキュラム(必修科目「地域生活学演習Ⅰ～Ⅶ」)の中でキャンパス外での課題発見プログラムを連続的に行ってきた。

本報では、1年次に課題解決型ワークショップを行った学生が、2年次以降に行う授業における学生主体の地域活動の中から、教員養成に特化したフィールドでの活動方法とその評価について報告する。

業内では学生の代表者(主に3年生)が責任者と意見交換等を行いながら目的を持って活動を行う。

表2 課題発見プログラム実施内容

回数	内容
第1回	授業内容説明、グループ分け
第2回	地域の方との顔合わせ、意見交換
第3回～第12回	各自活動(信頼関係の構築)
1～2回分	学生主体のイベント等
第15回	発表会

各期の最後に発表会を行い、個人の目的が達成されているか、発表で活動の内容・効果が伝えられているかを学科で作成したコモンスティック指標に基づく発表用ルーブリック指標を用いて評価した。評価者は学科教員(授業担当者外も含む)、履修学生である。学生の社会人基礎力の評価には株式会社リアセックの「プログテスト」を用いて確認した。

中・高教諭一種免許「家庭」を取得希望する学生を中心に活動できるフィールドとして、学童保育と通学合宿を提供した(表3)。

表1 九州女子大学の基本情報

学部・学科(専攻)		取得可能免許・資格(抜粋)
家政学部	人間生活学科	中・高教諭一種免許「家庭」 二級建築士受験資格
	栄養学科	栄養士免許 管理栄養士国家試験受験資格
人間科学部	人間発達学科 (人間発達学専攻)	幼稚園教諭一種免許 小学校教諭一種免許 特別支援学校一種免許 保育士
	人間発達学科 (人間基礎学専攻)	中学校教諭一種免許「国語」 高等学校教諭一種免許「国語」「書道」 図書館司書
総学生数		1,229名

表3 各活動フィールドに携わる学生数

年度	学童保育	通学合宿
H28年度	3年生:3名	3年生:5名
	2年生:2名	2年生:4名
	5名	9名
H29年度	3年生:2名	3年生:4名
	2年生:3名	2年生:3名
	5名	7名

【研究方法・研究内容】

本学科は多方面の免許・資格を選択し取得することができるため、地域活動内容もそれぞれの免許・資格に役立てることができる複数のフィールドを提供している。

学生は、提供されたフィールドの中から1つを選択し、1年間の活動の中で、課題を発見し、解決できるような取り組みを行う(表2)。フィールド活動は、課題解決型ワークショップを経験した2、3年生に開講し、時には2、3年生合同で活動する。活動開始前に担当教員は、活動フィールドの責任者と打ち合わせをしておくが、授

学童保育

学童保育の活動は、週2回程度のボランティア活動による児童の観察を行い、よりよい放課後の過ごし方を考え、課題を選定し、学童の指導員と調整のうえ、実践に移した。実践内容は、児童が宿題を集中して行っていないという課題について、「宿題を行う環境整備」および「宿題をしてから遊ぶ習慣づけ」を解決策として提案した。



図1 学童での宿題空間の改善策

通学合宿

通学合宿は、9月の第2週あたりの1週間(6泊7日)で行われている。活動は、主に児童の生活中的の見守り(気付きを促す発問)と調理時の衛生・安全確保等である。主催者の説明の後、3回行う事前指導の内容について調整を重ねる。学生は、この3回の事前指導時の児童の行動から、食育(調理)と児童への接し方について、自分の課題を設定し行動する。



図 2 通学合宿事前指導と調理・食事の様子

【研究成果・分析結果】

学童保育では、実際に宿題時の机の配置を変え、児童がある程度集まったところで、班単位で一斉に宿題に取り組む活動を行った。改善前後にアンケート調査を行った結果、宿題に対する苦手意識が弱まり、習慣化する傾向がみられた。

通学合宿では、参加児童数が22名と例年より多かったため、1回に児童が作る調理量がかなり増えた。事前指導で、手洗いの大切さについて教えるとともに、合宿のしおりにも手洗い、包丁の置き方、野菜の切り方を写真付きで掲載し、安全・衛生に注意した。身だしなみの確認や、学年に応じた作業への促し、配膳を助けるためのランチョンマットの導入など各自が様々な課題から児童への指導、声かけを行った。

どちらの活動も、学生主体の活動ができており、先方の責任者と学生代表(連絡担当者)との報告・連絡・相談、および学生と担当教員との報告・連絡・相談ができている。この2年間の活動が評価され、平成30年度のボランティア依頼も受け、継続した取り組みとなった。

発表の評価では、活動の目的、課題設定、実践、振り返りがしっかりまとまっており高評価を得た。また、ルーブリック評価に関しては、1年次の課題解決型ワークショップの発表時から、同じ評価指標を用いて評価を続けているため、教員評価と学生による他者評価の結果に大きな違いがみられなくなった。この結果、発表においての重要な観点や、発表に耐えうる必要な準備などを学生自身が学び取り、より地域への情報発信力が伸びていると考える。

プログテストの結果については、大きな変化はなかったが、対自己基礎力に関しては、平均より高い結果となっていた。また、構想力が低かった学生は、大きく伸びていた。

【今後の展開】

本学科には、教員免許取得希望者以外にも、多様な免許・資格取得希望者が存在する。教員免許取得希望者以外の地域活動に関するデータも分析し、地域に貢献しながら社会人基礎力を向上させる必修科目としての授業展開を探っていく必要がある。

【引用・参考文献】

○社会人基礎力

www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf

○九州女子大学・九州女子短期大学地域教育実践研究センター
『平成29年度地域連携事業報告書』